

ホトトギス

六月号

ホトトギス 昭和十四年六月号
創刊二十二年六月号
発行所 東京 日本橋区本町二丁目 日本橋本町二丁目 日本橋本町二丁目
編集者 藤田 龍雄
印刷所 東京 日本橋区本町二丁目 日本橋本町二丁目 日本橋本町二丁目



句日記 汀子

平成二十八年六月四日 芦屋ホトギス会

どこからも見えぬ浮巢でありしかな
苔の花咲きなり大方主留守
納得の結果なりけり明易し
軽暖の心持ち寄る会となる

六月五日 下雨句会

蜘蛛の囲に朝の油断のありしかな
草笛を一人が吹いてつまらなく
雨止んで未央柳の花の修羅
人偲ぶ未央柳に朝の雨
こんなにも未央柳のありしこと

六月六日 ロイヤル俳壇

咲いて知る石榴の花でありしかな
手を出さぬ口も出さぬと溝渡へ
思ひ出す一人の作者花石榴
考へを涼しく纏め置くことに

六月九日 清交社

短夜や早目早目の旅支度
日和まで呼んで行きたる雨蛙
又旅の打合はせとて明易し
山梔子の匂ひは風の意のままに
短夜の一人住まひといふ自由
山梔子の香の二歩三步速さかな
雨蛙すでに気づかれをりしかな

六月十日 工業倶楽部

雨粒に所在置きたる蜘蛛の糸
車寄せ未央柳に触るるほど
夏至といふ油断のありし家路かな
大蜘蛛の走りし壁の残りをり
わが庭の土に馴染みて額の花

氣を許すこともなければ夏至夕べ
夏至といふ日帰りの旅組むことに
声悪しき方が鳥の子なりけり
梅雨といふ外出心に置きしもの
庭松を聳としたる鳥の子

六月十四日 絹業倶楽部

香の所在問うてみかんの花の下
はつきりとしなぬ梅雨入りでありしこと
この甘き香に羽音あり花みかん
ひと休みとは梅雨入りせし後のこと
旅予定次々ありて梅雨に入る

六月十五日 夏潮句会

見下ろして下さい合歡の花の今
夏菜莢の熟れて酸っぱいかも知れず
声閉ざすことの叶はぬ網戸かな
一日の時間やりくりして涼し
六月十八日 北近畿ホトギス俳句大会前日句会

二三步を寄れば緑の木蔭あり

この大地火山の歴史語る夏

梅雨晴をつなぐ二日の旅となる

六月十九日 北近畿ホトギス俳句大会

梅雨の坂句碑まで辿りつきにけり
梅雨晴の昨日を遠くしたる旅
なつかしき楓若葉に光る句碑
六月二十日 アサヒカルチャー句会
明日は夏至刻々流れゆく時間
梅雨の旅らしく降られしことも又
一日晴れ一日降られて梅雨の旅

六月二十一日 有恒俳句会

夏至の日の予定加はる豊かさよ
雨上り夏至の明るさ取戻す
庭の蚊に好かれてをりし主かな
雨止んで短夜明くる早さかな
蚊を連れて入り来し客二十人
原稿を一つ書き上げ明易し

六月二十一日 無名会

梅雨といふこと忘れぬし一日かな
稿債を心の隅に置きし梅雨
栗の花こより丹波路となりて
又一人返して来たる梅雨の坂
梅雨晴をつなぐ二日の梅雨かな
川に道沿へば音あり梅雨山路

六月二十三日 きざらぎ句会

この匂ひやはり丹波路栗の花
黒南風を連れ来しやうな旅路かな
窓開けて閉めて山路の栗の花
栗の花匂ひに慣るることなく
黒南風の真只中に着陸す

六月二十三日 アネネ句会

ガーベラの花に今宵の会となる
似合はぬというてをられぬ夏帽子
灯点せば驚く蜘蛛と我とあり
ガーベラの花の化身となるは誰
見逃せし蜘蛛がどこかに潜む部屋

六月二十四日 時雨句会

時流れぬしを忘れし五月閣
若竹の伸び行く勢ひとどまらず
伸びるだけ若竹伸びて空広し
健康に生きゆく一人今年竹
着陸の態勢を問ふし今年竹
つばに松抜いてしまひし今年竹
ベランダの修理進みて梅雨の晴

六月二十五日 句会と講演の会

ただ自然愛して暑さにも耐へて
梅雨晴れて汀子に聞かといふ講話
長生きもあるがままと梅雨に処す
こんなにも世界大揺れせし暑さ
考へてみれば暑さが好きなりし

六月二十六日 悼 後藤立天様

梅雨一日悲しみ惜しみ祈るのみ
惜しまるる命を天に帰す梅雨
ただ祈る梅雨の命の尊しと

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十八年六月二日 蕉心会

富士よりの薫風スカイツリー磨く
軽暖の江東区民てふ歩幅
青嵐蕉像の顔歪ませせて
夏潮に水尾消されゆく消されゆく
遊船の夜に向つて試運転
夏服や今より太つたらあかん
箱庭の主の夢は夜ひらく
時計草塗りたくりたる青嵐
記念館山家めきたる栗の花
水濁り金魚断末魔の叫び

六月三日 六甲会

紫を点描として著 莪 豊

百年の旧家網戸の綻びて
潮風に網戸染め上げられてをり
網戸越し火星弾けてをりにけり
六月四日 芦屋ホトギス会

鳩の巢に湖北弾んでをりにけり
母一人子一人 人生 家 明易し
教会にちよと寄り 芦屋川 薄暑

六月五日 野分会芦屋例会

青嵐味方に今日も勝ちました
青嵐火星磨いてをりにけり
蠢いて蛆と知りたるより悲鳴

六月五日 青嵐会芦屋例会

夙川の風の育む 蚩かな

夙川の風あるがまま 蚩の夜
東京の暑さ 生家の暑さかな
虚子館に暑さ運んで来たる君

六月九日 土筆会

蜻蛉生る池に歴史を重ねつつ
代田水蝦夷に大地のある限り
連の生れて代田の出来上る
人寄せて羽音沈めて花菖蒲

六月十二日 公益社団法人日本伝統俳句協会総会

地震越えて来し友迎へ 五月晴

六月十三日 朝日カルチャー若草句会

五月雨に副都心てふ人出かな
繡線菊の群がり咲いて目立たざる
五月雨や都庁天辺揺れてをり
伝統といふ言の葉にさみだるる

六月十四日 北國文芸選者時

色付いて実梅は風の一部

六月十六日 登高会

柚の花の杓子定規な五弁かな
柚子の花咲いて空気の入替る
雲一つ二つ三つ四つ五月晴
鳩の子の浮くも潜るも遺伝かな

六月十七日 芭蕉記念館俳句入門講座

紫陽花や小学校は二時 限目
子等走る紫陽花の毬揺らしつつ

六月十八、十九日 北近畿ホトギス俳句大会

首塚の魂を鎮めて木下 闇
六さんも六健さんもギャグ 涼し
時鳥鳴いて三丹 国境
月涼し火星と土星侍らせて
五月雨今日はどうした晴れ男

六月二十日 目黒学園句会

キリシタン灯籠鎮め五月雨 雨る
街白夜オペラハウスを出でてより
鈴蘭の卓にボルドー香り立つ
君追うて白夜を追うて行く 旅路
師弟句碑てふ五月雨に光るもの
五月雨明智の栄枯秘めし 城

六月二十五日 ホトギス社句会

ダイエツトして暑に耐へてをりにけり
暑さ吹き飛ばして熱き質疑かな
木花の開耶姫舞ふ 臯月富士
ひつそりと学生街の茅の輪かな
犯罪に巻き込まれたる池 暑し

六月二十六日 青嵐会東京例会

五月晴バス二十分待つ 都心
マンションに足場組まれてゐる 暑さ
緑蔭を出るより首都の風となる
冷房の効くより佳人現はるる

六月二十六日 野分会東京例会

人よりも蛆正直でありにけり
青嵐屍 浮べし池の 黙
都心てふここにも古墳 青嵐
蛆を飼ひ都会の生活にも馴染み

六月二十八日 若水句会

神宮の参道 長し蟻小さし
神宮の杜梅雨寒に縮こまり
鳥の子餌を欲る午後の喫茶店
中国語万緑の杜 震はせて
鈴蘭の鈴を鳴らせば 聖変化

六月三十日 悼 後藤立夫様

俳聖の許へ涼しき 帰天かな

雑詠

廣太郎選

雪女郎驚張りを音もなく 神戸 山田佳乃

葵紋菊の御紋へ雪明り 同 同

二条城守りて小さき雪だるま 同 和田華凜

会ひたいは好きといふこと春隣 同 同

神の世は国栖に始り紀元節 同 同

恋猫に恋の掟はあらざりし 同 熊本 岩岡中正

ゆく年のうしろ姿のやうなもの 同 同

亀が貌あげて御慶をのべにけり 同 同

冬泉のごとく心に湧けるもの 同 福山 竹下陶子

勝独楽の回り澄みたる孤高かな 同 同

年忘おのが未来の第一歩 同 同

冬ぬくきことに地球の病んでぬし 同 同

寒晴の海空よりも上に浮き 岡山 伴 明子

枯草が地の鬣となる日差 同 同

部屋の隅持ち上がりたる寒の月 同 同

まんさくや光は踊り風歌ふ 神戸 涌羅由美

古楽譜広げて獺の祭めく 同 同

ほつほつと色解き初めし木の芽風 同 同

虚子山廬小春の句碑を撫でて訪ふ 相模原 木村享史

虚子恋うて来てや山廬の炬を開く 同 同

綿虫も山廬の過客見送りぬ 同 同

魚潜る獺の祭の始まると 神戸 立村霜衣

金縷梅の風にいたぶられても金 同 同

たこせんの真つ直ぐ割れて春浅し 同 同

寒晴やビルの隙間を塗りこめて 龍ヶ崎 今橋眞理子

寒月や会ふことのなき人をふと 同 同

つつがなく一と日を終へて足袋を干す 同 同

病床や朝の障子と夜の障子 静岡 須藤常央

進む程冷たき道となりにけり 同 同

寒きゆゑ神を畏るる心あり 同 同

釣果無く釣人雪解釣つてをり 東京 橋本くに彦

昼と夜の声使ひ分けうかれ猫 同 同

恋猫のこりず夜つびて武者修行 同 同

太陽がいつぱいの沖避寒宿 奈良 古賀しづれ

春遠からじ波唄ひ雲笑ひ 同 同

春の音春の光を生む汀 同 同

小さけれど鬱々とする聖樹かな 神戸 後藤比奈夫

灯点れば急に遠退き聖誕樹 同 同

聖誕樹雪を忘れしにはあらず 同 同

軽く降り出してつもりて重き雪 長岡 安原 葉

寒月の明るさに雲脱ぎし富士 同 同

今の世も箱根関所は風寒し 同 同

雑詠句評（五月号より）

肖子・美奇・とほ歩
保佳・憲明・むつみ
静龍・中正・眞理子
葉・廣太郎

あらたまの年ハイにしてシャイにして

神戸 後藤比奈夫

作者の著書『俳句の見える風景』（平成十一年・朝日新聞社）の中に「四月は陽気で好き放題言えそうですが、実は目の位置と心の角度が何よりも大切な月なのです」という一文がある。「心の角度」とは何と難しい言葉だろうと思いつながら、それが「観る」に通ずるのかもしれないと感じるが、今年その四月で百歳になられる作者である。掲出句は「あらたまの」という枕詞に、幾度となく巡り来た新年とは違う感慨がこめられておりその上で、この一年はまずハイ、そしてシャイ。一読した時は自由な言葉に氣取られるが、言葉の意味を考えながら味わっていると、作者の心情がしみじみと伝わってくる。（肖子）

若々しい感覚で新年の喜びを明るく表現している。御歳の事を申し上げると失礼であるが、まだまだこれからの人生を未永く謳

歌する姿勢が伝わってきて、悲しみを乗り越える気迫も感じる。「ハイ」と「シャイ」のリズムも面白く伝わってきて、読者が一番元気づけられるのではないだろうか。（廣太郎）

小原流てふ霜枯を活けにけり

吹田 生澤瑛子

霜にいためつけられて枯れた草木、どんなものであろうか。小原流であれば朽ちかけた大木に黒く霜枯れた大きな羊歯、その上に被せるように薄茶の濃淡の例えば枯芙蓉などを形を面白く組み伸ばし……などと筆者はかつて楽しんだ活花を思った。

霜枯の深い味を素晴しく活けられた作者。（美奇）

生け花の世界は筆者は門外漢であるが、一見美しさを追求する華道においては、霜枯はどちらかというとネガティブな素材のように見えるが、実際この霜枯を景色として表現する作法があるという事だ。何とも奥の深い華道の世界と、日本人の自然に対する畏敬の念が、句を通して伝わってくる。（廣太郎）〈以下略〉

天地有情

所々にまだ過日の雪や京の路地
 整ひし庭の風情も雛の宿
 新月を確と見てゐる心の目
 蠅螂の星を目差してゐる眼
 こころ寄せ虚子山荘の炬を開く
 落葉積む音に山廬の夜の更くる
 読初の火点し頃となりにつり
 初暦掛けたる釘も古りにけり
 日脚だけ伸び病室といふところ
 冴ゆるてふことも一会と思ひつつ
 さよならは言はず解けゆく雪達磨
 等分といふ愛もあり愛のチョコ
 昇降機開きてしまりて春隣
 来る 筈の 人心 待ち 春隣
 大雪や止まらぬ駅に停車して
 よく晴れし富士移りゆく雪けむり
 菰のまま雪に埋れし寒牡丹
 長男の次男のバレンタインデー

長岡 安原 葉
 同 稲畑廣太郎
 東京 相模原 木村享史
 同 熊本 岩岡中正
 神戸 後藤比奈夫
 同 和田華凜
 同 東京 今井千鶴子
 同 河野美奇
 同 神戸 三村純也
 同

犬またも庭の寒肥掘り返す
 寒肥に庭木の眠り深かりし
 一病の息を吹き吹きなづな粥
 この荒ぶ風を耐へなむ春隣
 緑蔭の真ん中にゐてうすみどり
 上の空三社祭の近づけば
 老の来て指図ばかりや溝浚へ
 一点の隠密の黙蟻地獄
 雪富士の全容見せし三日かな
 松過の独りの暮らし始まれる
 降る雪や眼をまんまるの陶狸
 正月の妻をいちにち預りぬ
 知らぬ間に涙こぼる寒さかな
 人だけが悴んでゐる夜明けかな
 美しき齢は問はず寒桜
 この風の匂ひ六甲山は雪
 偲ぶ旅待てば風花舞ふ湖畔
 寒林の黙に歩みて力得し

龍ヶ崎 今橋真理子
 同 東京 山田閏子
 同 同 今井肖子
 同 福山 竹下陶子
 同 仙台 赤川誓城
 同 富山 若土白羊
 同 袋井 湖東紀子
 同 同 同
 同 西宮 本郷桂子
 同 千葉 大木さつき
 同

花子選

帰路

稲畑汀子

今年の「高浜年尾先生を偲ぶ初句会」は、再び富士山の裾野、山中湖畔にあるホテルマウント富士で開催されることになって、希望者が多く盛会となった。

このホテルは、伝統俳句協会を立ち上げたときに、隔年で開催された国際俳句シンポジウムのために来た、懐かしい場所である。

年末年始の宿泊客に、もし富士山が見えなかったら宿泊費を返すというほど、富士山への展望が最高のホテルである。

一月第二週末の天気予報は最低であつた。各地の天気予報の中では、大阪にも雪だるまのマークがついている。しかし、そのマークもまもなく消えた。

行く先は富士山である。一月の寒の内であることは承知していた。何とか、参加する人達の交通が無事であることを祈った。

私は前日、朝日俳壇の仕事の後、工業倶楽部の初句会に出席して、東京から小田原に向かった。出発の朝はよく晴れていた。しかし、テレビでは大寒波の報道が流れていた。

関西から参加される方も多く、集合時間に間に合うか心配であった。勿論、全員が揃うまでは出発はしないが、それでも気にかかる。心配は杞憂であつた。余り遅れもなく何とか全員が揃つて出発することができてほつとした。

富士山はどうしても頂上を見せてくれないが、バスがカーブする度に歓声があがつた。

「毎回、完璧な富士山が見えるなんて大間違い。ここまで見えたら御の字だわ」

私は内心の期待に反して小さく眩いていた。

未明の三時、山中湖の見える窓から乗り出すように西の空を見ると。暗い空にくつきり富士山が見える。頂上を覆った雪が白く浮きだすように、快晴の富士山があつた。

「朋ちゃん起きなさい。バッチリ富士山が観えるわよ」

「知ってるわよ。さつきから何度も見ているもの」

防寒具を身に纏い、急いでホテルの庭に出た。既に何人か仲間達が、食堂の前の庭に出ている。

「わー、寒い」

「マイナス十一度だそつですよ」

歩く場所の雪はすっかり掻き寄せられてあつて、ただ、どつと

押し寄せる寒さに身を縮めるばかりであった。

暗闇の空に見える富士山を渡る雲は、富士山の全容をすつきりとは見せてはくれない。

東の空の稜線が明るくなっている。

私は虚子の「東に日の沈みある花野かな」の俳句を思い出していた。……沈みたる……ではない。……沈みぬる……である。今から、日の出となる、辺りが明るくなりつつある状態なのだ。

「あー」

辺りがぐんぐん明るくなるにつれて、富士山の頂上を隠していた雲が移動を始めた。稜線が空へ伸び、頂上の雪が姿を見せ始めた。頂上を隠していた雲は薄くなり、朝日が東の稜線に全容を見せるのと同時に、すっかり薄れた雲が飛ぶように失せ、頂上が見えた。恐ろしいような瞬間であった。

「まさか」

その瞬間を私はしっかりと捉えた。次の雲が来て、再び富士山の頂上は隠れてしまった。

「見たぞー」

私の心はもう、帰路の関ヶ原の大雪へと移って行った。

